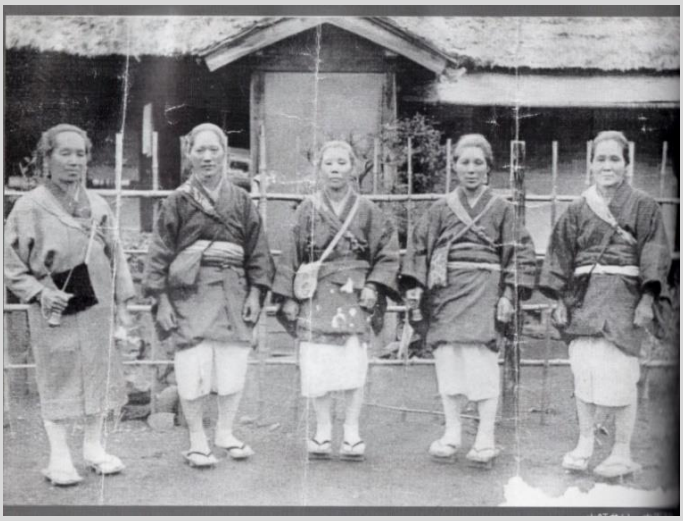
新四国相馬霊場八十八ヶ所を巡る会資料



相馬霊場を巡るお遍路さん

戦後の婦人講が相馬霊場巡りを行う姿です。
👈黒い頭陀袋の先達？と下駄姿のお遍路さん。

子の神大黒天柴燈護摩供

手賀大橋近く寿の子の神大黒天の境内で行われます。真言宗派は柴燈護摩火行（さいとうごまかぎょう）ですが天台宗は採燈護摩、醍醐寺派は斉藤護摩と記します、その理由は本文で・・・

旧水戸街道　八坂神社を望む　自転車に乗る杉村楚人冠氏　大正13年

楚人冠邸は、庭園は自由に入ることが出来ますが、建物内は入場料が必要です。

◆ 天王台駅から我孫子駅までのコース地図　　赤色の線　徒歩約３時間 9.5Km

新四国相馬霊場巡り、我孫子天王台駅

旧水戸街道と成田街道沿いの札所を巡る

和歌山県産富有柿の林に百五十町石

左写真に写る南海鉄道高野線の九度山（くどやま）にある町石柱は、2017年9月16日夕にNHK-TVのブラタモリで紹介されました。

富有柿の主産地である九度山には「町石道」という道があります、高野参詣道とも云われています。

紀ノ川畔の慈尊院が出発基点で、三十六町（6里）8時間を登ると高野山大門前に辿り着きます。

1丁毎に「町石柱」が立っています。

昔は、この高野参道を登るのが一番近道でした。歩くしかありません、車道は別ルートになります。

※　1町（面積も含、距離は丁、町歩ともいいます）はメートル換算で約109ｍです。

取手と我孫子の相野谷という地名

取手の相野谷川と我孫子の相野谷通り、同じ相野谷（あいのや）にはどのような関係があるのでしょう。

取手の相野谷は河川名で、下高井から利根川に合流する、総延長5Km程の短い一級河川です。

我孫子の相野谷は「相野谷通りと、相野谷陸橋」にあり、その名前のルーツを探ってみたところ、かつては常磐線の踏切名で平仮名でした。

明治22年の常磐線開通時に、「取手の渡し」と湖北間のお遍路さんの大師道を分断したと思われるのが「あいのや踏切」のルーツと思われます。

（下写真、あいのや踏切跡）

この相馬霊場大師道は、江戸時代には存在していた様で、下ヶ戸から青山まで旧水戸街道を経て久寺家で柴崎からの道と合流して、土谷津、布施弁天へと続いていました。

下ヶ戸には、大正時代の大師道の石柱が所々で見受けられ、その古さを知ることができます。

あいのや踏切があった常磐線の線路脇には地蔵尊が電車を見送る様に立っていて、また昭和三十年四月建立の牛馬供養碑が残っています。

更に、地蔵尊の先には相馬霊場の「大師道」の案内石柱や取手と布施への分岐路道標があります。

昭和57年、常磐線複々線化で常磐線緩行の千代田線の取手延伸で線路が増設されたため、踏切が廃止され、あいのや踏切は完全に分断されました。

あいのや踏切は新道により常磐線をまたぐ跨線橋として移設され相野谷陸橋となり、陸橋を通る道路を相野谷通りと名付けられました。

踏切名が道路名となる大変珍しい相野谷通りです。尚「あいのや踏切」は平仮名表示の様でした。

地蔵尊像とあいのや踏切跡、線路の向い側には、線路に至る古道が残っている。

取手市の相野谷川（あいのやがわ）は、利根川水系の一級河川です。相野谷とは、どういう意味なのでしょう。意外にも下総国豊田郡（現常総市）にそのルーツがありました。常総線北水海道駅の国道R294号柏

～会津若松線と R354 号高崎～鉾田線の交差点相平橋西十字路の前の広い畑中に相野谷神社の社殿があり相野谷のルーツの様です。

国語辞典より、相野谷とは、平らな原野の中に自然にできた沼と谷または水路だけの風景、とある。

先の鬼怒川決壊時は１ｍほど水没、294 号は通れませんでした。

打始

第六十五番、日照山無量院　真言宗豊山派

ご本尊、不動明王、

ご真言、のうまく　さんまんだばざらだん　かん

移し寺、愛媛県川之江市の由霊山三角寺

御詠歌、おそろしや三つのかどにも　入るならば

心をまろく慈悲を念ぜよ

無量院は「青山の十一面さん」と言われ、沼地に住む利根川沿いの村々は、大洪水の度に青山台地に逃れ、無量院にお世話になった記録が残っています。

創建は不明ですが境内にある阿弥陀三尊種子板碑には正和元年(1312)と記され、更に室町時代の十一面観音像を所蔵されていた事から寺の存在が推測されています。

現在の御本尊は、明治時代には既に不動明王であった様でいつ頃に変わったのか、中峠の龍泉寺門末となって以降と思われますが是も不明です。

入口にタブの巨木があり、樹齢二百年で市の保存樹に指定されており、寛文十年(1670)建立の如意輪観音像が木の根元にありました。

大師堂は入口左手にあり石造りの弘法大師像と木造の弘法大師、新義真言宗始祖の覚鑁(かくばん)興教大師像が安置されています。

対面の光音堂に沢山の「すりこぎ棒」が納められています、此のすりこぎで痛い所を叩くとご利益があり、願いがかなったら新しいものをお返しする、二百年前からの風習が残り信じられていました。

本堂は昭和61年に改築されています。

また、取手の渡し場に最も近い処であり、利根川や常磐線架橋の先に取手市を望めます。

青山八幡神社。

無量院境内の南側にあり、祭神は誉田別命。かつては日天社が境内にありました。

日天社は野田市の櫻木神社が知られており、天照大神と大国主命が祀られた櫻木社の社殿は美しい。

桜木神社は、正月七日間限定のご朱印が有名です。

青山は水戸街道利根川の渡し場であり、道中奉行の水戸藩の管轄に置かれた宿場でもありました。

水戸街道柴崎の旧宿場と柴崎城址

国道６号の取手から利根川を渡り我孫子市に入ると、左側に柴崎の旧水戸街道との分岐路が現れます。

旧街道の右側には大きな屋敷が数件並び、やがて柴崎神社にたどり着きます。

旧水戸街道と分岐する交差点内左には、小学校への細い道があるので進むと左側は舌状台地で畑が広がっているのですが、柴崎城址跡地で戦国時代の関東武士相馬氏の河村刑部が城主でした。

河村氏は、中峠(なかびょう)城主でもあり、柴崎城を知行していたものと考えられています。

利根川の湿地帯を望む柴崎台地の突出部に、昭和30年代末まで土塁、空掘り跡、虎口などが東端部に残り、また旧柴崎宿場の街道沿い両側には、物見の櫓台跡があり、三対四郭からなる直線連郭式の戦国城郭であったようです。柴崎城は戦国時代、高城氏の支配下にあったと伝われています。

永禄年代に荒木三河守胤重が入城、天正二年(1574)頃は古河公方家の御陵所となりました。

永正二年(1505)柴崎八郎史郎の名が本土寺に残る。

昭和40年代初めの宅地造成以前は、三郭で構成された城郭であろう当時の様子を克明に伝えていた。

柴崎村たい「女松ヶ岡駈入」のこと

旧水戸街道柴崎に元旗本家給人(きゅうにん)邸の川村磯右衛門家の屋敷が道筋にあります。

江戸時代の女性からの離縁が、如何に大変であっ

たか、という古文書の書付が見つかっています。
「女駈入(駈込み)のこと」は、古文書を勉強するための教材としても使われていました。
川村磯右衛門は旗本新見家知行の村々の筆頭名主、しかも柴崎村三給名主中唯一の苗字帯刀名主で幕末の旗本家給人ともなった人でした。名主の農閑余業として文化14年(1817)酒造株を引き受けています。
酒販売の最盛期には現在の我孫子市内は勿論岩井、大室、呼塚、取手、花野井など十二村に供給していました。名主川村磯右衛門の妹「たい」の覚は、川村正信家に残されています。
波乱万丈の女の生涯が克明に綴られた、江戸時代の「覚」(かく、おぼえ)文書の一様式。備忘のために記したものは珍しく貴重なのだそうです。
「松ヶ岡」とは、北鎌倉の松岡山(しょうこうざん)東慶寺で松ヶ岡御所寺と言われ、上州新田郡世良田(じょうしゅう にったごおり せらた)の満徳寺と共に、幕府のお墨付きの駈込寺、縁切り寺でした。
「たい」は天保四年に14歳で、流山の酒造商相模屋重左衛門家に嫁入りしました。
この時の嫁入り衣装や家具、道具などの購入費用はばく大な金額で、江戸大丸屋、越後屋、取手の田丸屋などで百五十両も使い、振袖だけで七着も作らせています。
幕府は翌年「天保改革」で倹約令を出しています。
夫の弥十郎の相模屋は流山の酒蔵でした。流山は既に味醂で全国に知られており「万丈」の堀切紋次郎や俳人小林一茶と親しかった「天晴」の秋元三左衛門(双樹)等の名は、「万丈味醂」や「双樹庵と一茶」で、現在でもよく知られている流山の名品名所処です。嘉永二年(1849)6月、弥十郎に事が起きます。
女性関係ではないかと推論されています。
同年9月、たいは松ヶ岡に駈入り。磯右衛門から重左衛門に離縁状を請願するが、弥十郎と面談できなかったのですが。翌年十月、離縁状が届き再縁の可能性を含めた条件で離婚が成立しました。
たいは、嘉永5年(1852)、布施の七朗兵衛の後妻となり生涯を共にすごしています。
江戸時代の離縁状である「三行半(みくだりはん)」は、女からは下せませんでした。又「たい」は、駈込み直後に離縁状の要求を始めていますが、駈込後27日間は御所寺で修行者として謹慎しなければならなかったようで、寺から許可が出ないと、女からの離縁状要求はできなかったようです。
更に、婚姻に於いても家と家との結縁であり、女側の家主か兄弟が、夫側の家主を通して本人から離縁状を得なければならず、誠にやっかいでした。
それ程、女性は虐げられていたようです。
この当時駈込み寺は全国に二ヶ寺だけで、上州新田郷の満徳寺も知られ、影に千姫がいました。
幕府公認の縁切寺は東慶寺と満徳寺の二つです、この二寺が幕府公認になったことは千姫(天樹院)に由来します。満徳寺は千姫が入寺し(実際には腰元が身代わりで入寺)離婚後は本多家に再婚した事に由来し、北鎌倉の東慶寺は豊臣秀頼の娘、後の東慶寺住持の天秀尼を千姫が養女として命を助け、この養女が千姫の後ろ盾もあり義理の曽祖父になる徳川家康に頼み込んで東慶寺の駆込寺としての特権を守ったとされています。
この二つの寺の特権は千姫により家康に認められたものであり、後年の江戸幕府もこれを認めざるを得なかったのでした。

満徳寺のある世良田荘徳川郷は徳川家の発祥地

新田義季は後年徳川義季と名乗り、後年義季の子孫徳川親氏は諸国放浪の上、豊田市である三河松平郷に住み松平親氏と名乗りました。
徳川三代将軍家光公は、家康の眠る日光東照宮の多宝塔、唐門、拝殿の建替えのため世良田東照宮へ移築し現存しています。
「お江戸見たけりゃ世良田へござれ・・・」と言われ、さらに、久能山東照宮から世良田東照宮を経て日光東照宮は一直線上に位置し「不死の道」と云われていました。

柴崎天満宮、大井天満宮、柴崎881

国道6号沿いの台地の端に立っている。

天満宮を所有する大井家は、將門の重臣久寺豊後(取手市新取手大山の大山城主)の弟で、將門戦死の後、落人として柴崎に住み、農を営んだと云う。

著者井上氏は大井家で「祝鎮座千五拾年記念柴崎天満宮　平成三年正月　大井氏」の文字と梅の紋所を染め抜いた手拭をいただいた。これを見てよく考えると、平成三年(1991)の1050年前は941年、これは天慶四年、すなわち將門が戦死した翌年にあたります。これは何を意味するのか。

將門戦死の翌年は、將門の一周忌にあたる。

恐らく將門の残党狩りがまだきびしく行われていたであろう。そんな中でも將門を敬愛する大井氏の一族は、ひそかに一周忌を取り行ったのであろう。

そして將門を神としてまつるために、將門が尊崇した菅原道具公を天満宮に祀ったのではないか。

神社名は天満宮だが、社前に毎年立てる幟(のぼり)には「須賀原大神」と書かれている。

天神様として菅原道真公を祀ることにより、実は將門公を祀りついで来たということができよう。

この天満宮はなぜか首天神とも呼ばれ、大井家では「正月の供え餅が首に見えるから」として、今でも供え餅は作らないという。

幟は大井家の分家八軒が二軒ずつ交代で、四年に一度当番が立てることになっている。

例年一月廿五日ころ社殿を開き、女性が接待することになっており、神酒を参詣の人に注ぎ、祭礼が行われる。平成三年には幟二本が新調され、我孫子市高野山(こうのやま)の松園琉紅氏の筆で文字が書かれた。境内の梅の木の横に立てられる。

年によって雪の降る日にあたったこともあるとのこと。また年によって梅の一輪の花が見られるかもしれず、何とも古い日本の美しいひとこまを見る思いがする。　「楽しい東葛伝説民話事典」より

柴崎村の中心部

柴崎神社と円福寺、相馬霊場創始者のお気に入り東源寺の三社寺があります。また、神社前の水戸街道向かい側奥を天王裏と云いました。昭和35年開業の常磐線の天王台駅名の発祥地です。

柴崎は、川村姓は多いが大井姓は少なく、久寺氏であった大井家は、現在不動産会社を営む。

国道6号と県道8号船取線が合流するところに、石尊社があるが隣接する東源寺や天満宮との関連は不明です。

第七十五番、青龍山医王院東源寺、

ご本尊、薬師如来、移し寺、香川県善通寺市の五岳山善通寺。弘法大師空海の生誕地です。

ご真言、おん　ころころ　せんだり

まとうぎ　そわか

御詠歌、われ住まば　世も消えはてじ善通寺

深き誓いの法のともしび

天文九年(1540)小田原城主北条氏康が守護仏であった薬師如来を本尊として開基した曹洞宗の寺です。

天然記念物指定の真榧(まがや)の大樹、樹齢250年がある、榧(かや)はイチイ科の常緑高木で古くは丸木舟や仏像の素材として使われ、今は碁盤の材料に使われている。また木の実は当時、子供の虫下しの薬として使われていました。相馬霊場開基の光音禅師のお手植えと伝えられています。

他に楠、欅等もあり、東源寺は風光が弘法大師生誕地の屏風ヶ浦(びょうぶがうら)の善通寺に似ているところから四国善通寺の75番が移されました。

新四国相馬霊場はここを起点に左右どちらから回っても中間里程にあり、従ってほぼ同じ距離ということから「**中回向所**(なか　えこうどころ)」と定められました。

光音禅師お気に入りの寺であったようです。

大師堂には光音禅師の位牌が祀られており、光音生誕の地である長野県松原湖の海尻(うみじり)の方々が取手を訪れた昭和59年には、ここ東源寺と取

手の長禅寺、金刀比羅神社を巡られました。
相馬霊場のあちらこちらで見かける、光音講は禅師の死後一族が中心となり信濃国佐久郡海尻で組織された講(組織)ですが、相馬郷にも広がりました。
一行は、長禅寺下の伊勢屋に宿泊して巡拝結願(けちがん)後は、成田不動から船橋経由で江戸に立ち寄り南牧村の海尻へ戻ったそうです。
平成元年完成の今の大師堂は大きく天井には杉の根が使われており「ボケ封じ」の御利益があると言う。境内には慈母観音像、多数の石仏石碑六地蔵がある。

電力中央研究所、此処には我孫子左衛門但馬守の我孫子城があったといわれているが、詳細は不明。
研究所北敷地内には、桜の老木が数十本あり、桜の開花時期には一般公開されることがありました。

第五十五番、柴崎羽黒山円福寺、真言宗豊山派。
ご本尊、阿弥陀如来と観音菩薩、勢至菩薩の脇侍、
ご真言、おん　あみりた　ていせい　から　うん
移し寺、愛媛県今治市の別宮山南光坊
御詠歌、このところ三島に夢のさめぬれば
別宮とてもおなじすいじゃく
すいじゃく【仏教語】、仏や菩薩が衆生(しゅじょう)を救う為に、仮に神や人間の姿となって現れる事。

開山は江戸時代初期、開山開基とも不詳だが、柴崎宿は渡し船の時代迄青山と共に最も栄えた所でした、以前は村の鎮守、隣の柴崎妙見神社の別当寺であったようです。昭和61年本堂の改築とともに、本尊の阿弥陀三尊像も補修されました。
大師堂の隣に平成2年建立の四国八十八ヶ所巡拝記念塔があり、大師堂前の足元に赤御影石の四国を象った敷石があります。五鈷杵(ごこしょ)をお持ちの木造の大師像は2体あり、隣に鯖大師堂、その隣に火炎を背にした像を祀る不動明王堂があります。

鯖大師、他所からの移しです。
我孫子市に鯖大師がある由縁は「なま街道と布佐河岸」によります。
なま街道は鉄道が引かれる以前に、鹿島灘や那珂湊から銚子を経て利根川を上り、布佐にて荷馬に積替え手賀沼北路の陸路を松戸の江戸川に運び、再び船に積替え江戸橋の魚河岸市場への街道をいうが、都会と地方を結ぶ経済効果の役割を担っていました。
相馬霊場の役割は、江戸の大店が、買付に取手や布佐に訪れ、店名入りの「まねき札」を残し、寄付をするようになり、相馬霊場巡りを兼ねて人々を呼び地方都市として繁栄しました。繁栄したために建立されたのが円福寺等の鯖大師であるのです。
四国八十八ヶ所徳島県の JR 牟岐線(むぎせん)、室戸シーサイドラインさばせ駅近隣に、四国番外霊場四番である「鯖大師本坊の八坂寺」があります。
御本尊は弘法大師(775～835)です。
番外ですがお遍路さんは必ず立ち寄ります。

鯖大師伝説を2つ紹介します。
工房大師さまは四国霊場お開きの時、難所八坂八浜の真中で、行基菩薩お手植の松の下で野宿され行基菩薩の夢を見ました。夢＝伝説ということです。
当所は土佐浜街道にて、お大師さまは土佐よりの馬子に積荷の塩鯖のお接待を乞います。
馬子は、お接待をせず、罵り立ち去ります。
お大師さま「大阪や八坂さか中　鯖ひとつ、大師にくれで馬のはら病」と詠まれると馬にわかに倒れ病みました。
馬子は、馬曳坂で思案にくれる。
馬子は気がつき、先程の僧がお大師さまなることを知り俄悔(ざんげ)、お大師さまに塩鯖一匹を献ず。
お大師様馬子の懺悔をあわれみ、お加持(かじ)水を作り馬子、お加持水を馬に飲ます。
お大師さま「大師にくれて馬のはらやむ」と詠まれると、馬の病気たちどころに治る。
馬子、馬の病気が治ったお礼をいい、己を俄悔し、お大師さまを礼拝する。
※　加持：心優しく触れてやり安らぎを与える行為

お大師さまは馬子を大砂の浜、法生島に連れて行き、塩鯖を海に投げお加持すると塩鯖は生き返って泳ぐ。馬子、この霊験に発心お大師さまの教えを受け、この地に庵を造り人を助け鯖大師の霊験を今に伝える。

行基菩薩による説、(668～749)

行基が四国を巡錫している時にこの地を訪れた際、鯖を馬に背負わせた馬追が通りがかった。

行基が鯖を所望したところ、馬追はこれを断った。行基はこれに対し「大坂や八坂坂中鯖ひとつ　行基にくれで馬の腹や(病)む」と歌を詠んだ。

すると、馬は急に腹痛で動かなくなった。困った馬追は行基に鯖を差し出した。

行基は今度は「大坂や八坂坂中鯖ひとつ　行基にくれて馬の腹や(止)む」と、「くれで」を「くれて」と1文字変えて詠むだけで、馬の苦しみは治まった。

円福寺と台頭

文化13年(1816)初代川村磯右衛門は、円福寺檀中惣代(檀家総代)であり、当寺は重要な旦那寺でした。

円福寺は、真言宗豊山派で奈良の長谷寺の末になりますが、江戸時代の頃は江戸四ヶ寺蝕頭の本所弥勒寺が下総国の触頭(ふれかしら)に属し、中峠の龍泉寺が直触頭(じかふれかしら)寺となっていました。

円福寺の台頭として、初代磯右衛門は、下ヶ戸西音寺、土浦市大岩田法泉寺、取手市桑原光明寺と共に月番の願書を、流山の東福寺の添簡とともに提出請願しています。月番は、奉行や各寺間の連絡業務を行う制度です。月番の組頭になることは、労力による報酬によって、村の財源になるために、檀家が努力しました。組頭名主がいる寺自身も、格上げされました。　我孫子市史研究第八号　小平久　より

柴崎神社

かつては妙見社、北星社と呼ばれ、明治13年から柴崎神社となった。祭神は天御中主命(あめのみなかぬしのかみ)と外六柱が合祀されています。

神域は広く整備されており、参道奥には社殿を守る一対の亀の石像、正面の扉には九曜星の紋がある。

新設の手水舎と三峰神社の別殿があります。

日本武尊、平將門、相馬重胤、荒木三河守等との関わりが伝えられています。

とくに平將門と叔父の良文が平国香と戦いで良文がまさに討たれようとした時、童形の妙見菩薩が現れ、敵の上に剣の雨を降らし救われたと言い伝えられており、以来、一族及び後裔の千葉氏、相馬氏の守り神となって、妙見社や妙見神社と呼ばれている。

妙見菩薩は北極星、北斗七星を神格化したもの、亀は菩薩の乗る聖なる生き物です。

中国では道教の神で、星を見て位置を確かめた遊牧民に信仰された。北方の守護神で玄武(げんぶ)という想像上の神獣で、足と首の長い亀に蛇が巻きついた形をしている。また玄武は亀蛇(きだ)とも呼ばれる。

境内には市内最古、永仁六年(1298)の板碑が発見されている。また、左手の塚の上に「日露戦役黒髪塚」という記念碑があり、大井いち他10名の女性達が夫の武運長久を祈って黒髪を手向けたといわれている。

休憩、トイレの借用申請をしています。

この先の**旧水戸街道は現在遮断され迂回路となります**

旧水戸街道を更に進むとアンダーガードがある交差点があります。右折して緩いカーブと坂の先の左側に我孫子市水道局のビルが現れます。このビルの4階に我孫子市教育委員会事務所が入っています。

実はビルの手前の路地道が旧水戸街道なのですがJR東日本我孫子車両派出所の車両保留場に遮られてしまうので、旧水戸街道のつづきは、県道8号船取線に迂回して常磐線を渡ります。

常磐線の船取ガード内の細い道の先の、泉交差点を横切っている道が旧水戸街道になります。

右折して我孫子駅方面へ常磐線を右に見ながら進みます。しばらく歩くと成田線の踏切を渡ります。踏切先の成田街道との追分で合流します。

右へ我孫子駅迄10分程の距離です。

相馬霊場巡りでは、柴崎神社から成田街道の高野山最勝院へお遍路するので、資料内地図に従います。

第廿七番、興旭山最勝院、高野山(こうのやま)。
真言宗豊山派。元龍泉寺末。
移し寺、高知県竹林山神峰寺。ご本尊、不動明王。
ご真言、のうまく　さんまんだばざらだん　かん
御詠歌、みほとけの恵みの心 神の峰(こうのみね)
山もちかひも高き水音。
(現在はこの歌が使われる)

明治の「寺院明細帳」には「天正20年(1592)創建と云うが古老の口伝です、『寛保元年(1741)開祖祐意和尚再建』、のち罹災し無住となったが享保六年(1721)農家の旧材を使って本堂を再建、本尊、厨子なども新調された」とあります。

現本堂は昭和49年の新築、客殿と庫裏(くり)が2007年新築されました。

境内の各家の墓には古い墓石が多く、渡邊家の墓にある寛永八年(1631)の一石五輪塔は我孫子市内最古の墓石といわれています。札所石標は安永五年(1776)に建立されました。札所創建は不明です。

大師堂は昭和37年の改築で棟札にある佐藤鷹蔵(たかぞう)は、のちに我孫子に住んでいたバーナード・リーチのデザインした三角椅子の家具などを作った名工です。

境内にはかつて桜の大木があり、小林一茶は、七番日記で文化七年(1810)三月廿九日に「野々下村通り柏村にかかりて、我孫子駅にて昨夜の三人に別ル、布川に入。高之山村に四国廿七番の観音うつして参詣有。是を新四国霊場といふ、庭に大桜有、布佐村に入。神輿大小二つかき出して「阿波大杉大明神、悪魔を払いてよいやさ」と笛太鼓三弦にてはやして、さらに祭のさまをなす。此里の疫神(えきじん)、疫病神の流行なる物から、かくするといふ。「苗代のこやしに草葡萄の入る土地ぶりなりといふ」とある。

「桜木や 同じ盛も お膝元　　一茶 」

この句は、まさにこの地で詠んだ如く・・季節も句帳記載日も一致するのですが場所が特定出来ません。一茶が訪れていた頃の本堂前には、斜めに傾いた桜の巨木があり「最勝院の寝桜」と言われていました、しかし昭和20年代の台風で倒れました。

「みほとけの ちかいのこころ かうのみね やいばのぢごく たとひあるとも」は、この当時の御詠歌として唄われました。

「けふぎりの 春とはなりぬ のべの草」

「手の奴 足の乗りもの 花の山　　一茶」は、一茶48才の作で北総行脚時代の名句といわれています。

一茶は40才代に、たびたび北総地方を行脚し、流山の双樹をはじめ、布川で回船問屋を営み俳人である古田月船(げっせん)、一茶の師匠であった西林寺の鶴老(かくろう)和尚、布施の彦兵衛を訪れていました、その旅は実に37回を超すと伝わっています。

地名の高野山は「こうのやま」といいます。

金剛峯寺のある弘法大師の高野山(こうやさん)とは違い「荒地の荒野が広がる山」を開墾したところであり、荒野山では「荒」が「凶作」を意味するために「高野山」と変化したという。

日本には日本種のコウノトリが生息しており、鴻巣とか鴻野山とかの地名が各所にあり鴻野山が高野山と化けたと伝わる。(角川地名辞典より)

第三十八番、子の神大黒天、
御本尊、子の神(ねのかみ)大将軍、
ご真言、おん　まこきやらや　そわか　(大黒天)
移し寺、高知県蹉蛇山金剛福寺
ご詠歌、ふだらくやここは岬の船のさお
とるも捨つるも法のさだ山

縁起では子之神将は、行基菩薩が諸国巡錫の折りに下総国国分寺で薬師如来と十二神将および大黒天を刻んで安置したが、国分寺がたびたび火災の災厄に逢うので、尊像を背負って諸国を遊歴した宥啓阿闍梨により、康保元年(964)此の地に一宇を造り安置されたと言います。

子の神大黒天は、腰下の疾患に霊験があるといわ

れています。子の神は山の神と同じく山頂にあることが多い、この信仰は山の尾根を歩いて行かねばならず、足腰が強くないとならず里に戻った時には、無事帰還のお礼に「わらじ」を奉納した。今はブリキのワラジが奉納されています。

【子の神】薬師如来とその信者の警護をする十二人の大将を十二神将といいます、子の神とは十二支の子(ね)毘羯羅大将(ひがらだいしょう)、を指します。

【大黒天】魔訶伽羅天(まかからてん)はインドでは、三面六肘(又は八肘)で鎧を付け武器を持つ仁王のような姿で強暴な戦闘神でしたが、中国に伝わると、厨房(台所)が潤うことで財を益す繁盛神となり、日本では福袋や打出の小槌を持ち米俵を台座にした、ふくよかな神に変身しました。神仏一体の時代の寺社で、大国主と大黒は習合し更に子の神も習合し鼠をその使いとして現在に及んでいます。

【昭和初期に手賀沼吟行が行われた地】

高浜虚子の俳句結社「ホトトギス四S」阿波野青畝(あわのせいほ)と水原秋桜子(しゅうおうし)、高野素十(すじゅう)取手市山王出身、山口誓子(せいし)等は、此の地で度々、吟行を開いていました。

【逸話、源頼朝】

源頼朝が旗揚げ目指し関東諸国を歩いていた折、我孫子の里で重い脚の病にかかり歩行困難となった為、沼近くの農家に身を寄せ数日過ごしたある夜、夢枕に大きな白ネズミに乗った白髪の老人が柊(ひいらぎ)の葉を持って現れました。そして、この地の鎮守子の神権現の化身であることを告げ、老人は柊の葉で頼朝の足を示し祓(はら)ったという。

後日、頼朝は将軍となり社殿を造営しました。

第四十三番、白花山延寿院、真言宗豊山派、

元大勝院末、大正七年ここへ移転。

御本尊、不動明王、

ご真言、おんあぼきゃ　べいろしゃのう

まかぼだら　まにはんどま　じんばら

はらばりたや　うん

移し寺、愛媛県源光山明石寺

ご詠歌、聞くならく千手ふしぎのちからには

大ばんじやくもかろくあげ石

古くから、子の神大将の別当寺であったといわれてきました。移転前の延寿院は、JR我孫子駅の北側にあり、久寺家の宝蔵寺から相馬霊場の南端に位置する興陽寺の途中に位置していました。

明治29年、常磐線の開通時に大師道は線路によって分断され、大正七年(1918)には、駅舎の手賀沼側が栄えたことにより、製糸業山一林組工場(現ヨーカ堂)の前に移り、更にその後、子の神に移りました。

柴燈護摩火渡り「火行」、

毎年10月の第4日曜日を定例開催日としています。火渡りを体験する場合は、当日延壽院受付で「体験札」又は「護摩木」五百円を購入して下さい。

通常ですと、午後から始まります。

柴燈護摩火渡り荒行は、古くから修験道(山伏)に伝わる秘法で行者は各家各位の祈願を祈念した護摩札を奉持して火の中に入り「不動の三昧(さんまい、精神集中が深まりきった状態)」に住しつつ信心各位の願いを祈ります。当山におきましても江戸時代より続く伝統的な火生三昧(かしょうざんまい)行事です。「火生三昧」とは不動明王が護摩の火の中に住するという意味で、「火渡り」とは、柴燈大護摩供を厳修した後、その護摩のおき火(炭火)を整備して、その上を歩いて渡るということです。

この護摩の火は不動明王の智慧の火で、我々のけがれ、心の迷いや煩悩を焼き清めて、ご加護をいただくものです。

柴燈大護摩供大祭りを厳修致しまして、皆様の願いを御祈祷致します。

不動明王、梵名「アチャラ(動かない)ナータ(守護者)」を意味し、「揺るぎなき守護者」の意味であり、空海、弘法大師が唐より密教を伝えた際に日本に不動明王の図像が持ち込まれたと言われます。

不動の尊名は、八世紀前半の菩提流志(ぼだいるし)が漢訳した「不空羂索神変真言経(ふくうけんさくしんべん・しんごんきょう)、不空羂索観音の所依とする経典)」に、不動使者が大日如来の使者として現れるのが最初です。

真言宗の柴燈護摩と他宗派の採燈、斉燈の違い

伝統的な真言宗系当山派の柴燈護摩に柴の字が当てられているのは、山中修行で正式な密具の荘厳もままならず、柴や薪で檀を築いたことによります。

天台宗系本山派が行う野外の護摩供養は、「採燈護摩」と書きますが、真言宗系当山派の柴燈護摩から「採取」した火により行われたので、採の字が当てられるようになりました。

また、真言宗醍醐派の正当法流を汲む真如苑(しんにょえん)宗の真如三昧耶(さんまや)流では、斉の字を当てて一斉の護摩修行を総称するとされています。

また、不空羂索観音は奈良東大寺の法華堂(三月堂)に祀られる壮大な観音像は、東大寺境内では最も古い堂とともに有名で、絢爛豪華な祭壇は必見です。

第四十二番、真言宗豊山派大光寺(たいこうじ)、御本尊、不動明王、移し寺、愛媛県一果山佛木寺

ご真言、のうまく　さんまんだばざらだん　かん

ご詠歌、草も木も仏になれる仏木寺

なおたのもしき鬼畜にんてん

開山開基は不詳ですが小金井の本土寺過去帳に「延徳二年(1490)五月、あびこ」の記録が有り、創建は室町時代だったようです。我孫子宿の中心にあったため宿場の発展と共に栄えましたが、文化二年(1805)と文政三年(1820)の両大火で罹災し建造物古文書をすべて焼失してしまいました。

本堂は仮堂のままでしたが、聖天堂は文化七年(1810)に再建され、その後、嘉永四年(1851)に高野山から夢告(むこく)大師像を迎え、安政三年(1856)には「御衣、御袈裟、御念珠の三品」が授与され厄除け大師としての信仰参詣が広まりました。

須弥檀中央の夢告大師像の両脇には此岸(現世)で極楽往生を説く釈迦と観音、彼岸(来世)で往生した者を迎える阿弥陀と勢至が一列に祀られていた。

脇侍四体が二体ずつ双方に向き合う配置で祀られていた、遣迎二尊像は、珍しい配置なので是非再現して頂けると嬉しい。

我孫子の聖天さま

境内奥に歓喜天堂があり聖天像が祀られているが秘仏とされているいるために拝観する事は出来ない

聖天堂棟札には、文化七年(1810)再建とある。

文化二年、文政十年(1827)と我孫子大火に見舞われています。聖天堂は罹災を免れた。

嘉永四年(1851)、夢告大師が迎えられ、相馬48番は「四十二番厄除大師」として信仰参詣が盛んになり多くの参拝者が訪れるようになりました。

歓喜天像は、像顔の男女双体像でガネーシャと云われる。男女合体像のため秘仏とされる場合が多い。

大根や巾着をお供えして願掛けします。

明治天皇御飲料井戸

明治天皇の行幸の際に休憩され、飲料されたという井戸が旧水戸街道沿いの角松旅館(村越半次郎家、旧我孫子脇本陣と間違えている場合が多いので気をつけて下さい。脇本陣跡小熊家は当地から260m先です)の成田街道向側に存在しています。

明治天皇は、明治17年(1884)12月6日午後3時50分頃我孫子に到着、ご宿泊。

天皇来訪のために、我孫子村角松旅館近隣の井戸水を検査し選ばれた水で炊飯や数々の料理と共に飲料水として選ばれた井戸です、目的は牛久女化ヶ原(おなばけがはら)の演習視察のために用意しました。

翌7日午前8時30分行在所を出発、利根川を新造の舟で渡り茨城県取手からは、茨城県令(県知事)人見寧(やすし)が利根河岸に奉迎して先導、女化原へ案内したといいます。現在は飲用禁止です。

情報提供：我孫子市のあらい氏より

第五十九番、自性山興陽寺(こうようじ)、曹洞宗、御本尊、釈迦如来、移し寺、愛媛金光山国分寺、ご真言、なーまく　さーまんだ　ぼだなんばく　ご詠歌、守護のためたててあがむる国分寺

いよいよめぐむ薬師なりけり

開山大凉玄樹和尚、開基山高八右衛門(檀家)、天正八年(1580)遷化による草創建立。

大師堂の創設は不明です、十九世紀前半期にさかのぼる建立と思われます。流れ造りの向拝付きという古い形を留めた造りで残っています。

山門の脇に、不詐竈酒入山門の石塔があります、意味は・・竈酒(くんしゅ)、清浄な境内への立入り制限で臭者や飲酒者は境内への入門を許可しない・・という意味です。

我孫子市史による興陽寺の縁起

興陽寺は、もと葛飾郡金杉村(現、埼玉県松伏町)高徳寺の末寺で室町時代最末期の草創でした。

開基の位牌には「開基覚了院殿天室自性大居士、延宝五年(1677)八月五日」とあるので、開山の寂年と開基の没年には相当のへだたりがあるが、山高家は徳川家臣千八百石という背景があり、当寺としては有力な檀家であったため、開基に宛てたと解されている様です。個人のお寺でした。

山高氏がこの地に知行所を宛行(あてが)われたのは寛文元年(1661)のことで、開基については過去帳に「牛込住、今墓有、直参旗本」と記されています。

享保11年(1726)には山高信礼?が法華経十巻を敬写して当寺に寄進しています。

相馬霊場の設置は安永五年(1776)といわれるが、石標建立年であり、既に設置されていたと伝えられていますが霊場開基時期は不明です。

開創時は第五十九番伊予国分寺移し、本寺の本尊は薬師瑠璃光尼菩薩とされていました。

旧薬師堂には安永年代以前すでに薬師及び十二神将像が安置されていた様子で、残されていた旧物厨子の板に「皆安永八己亥年(1779)十一月初八日、十二神将造立再、当山十四世代、右南鐐(なんりょう、二朱判銀)壱片、寄附当村部郎衛娘、願主当邑長右衛門」の墨書があることによって知られるが、これら諸像は文政の我孫子宿大火で類焼の厄にて現存していません。

明治の「寺院明細帳」には、境内仏堂二宇として、「薬師堂間口弐間　奥行三間　弘法大師堂間口壱間奥行壱間三尺」と記されています。

薬師像は本堂仏壇にまつられた舟形光背(ふながたこうはい)の木造金彩定印(きんだみ じょういん)、金箔の如来姿坐像であります。

僧形像二体が本尊の両脇に配されているが、曹洞宗永平寺開山の道元と当寺開山の大凉両禅師の像で、ともに椅子に坐す姿の木造彩色像であります。

仏壇両脇に達磨大師と大権修利菩薩(だいげんしゅりぼさつ)が右手を頭の上にかざしている姿で安置されている。達磨大師像は、朱衣(しゅい)を頭から被り、腹前の手を衣で覆い、衣端が膝から下に垂れ下っており、活眼で坐禅する姿を表しています。

享保11年(1726)の寄進奥書のある法華経を納めた筥(箱)に坐しているところから、当時の造像と推測されます。

大権修利菩薩像は達磨大師像と対をなすもので、腰をかけて右手をかざし、中国宋朝時代の服で招宝七郎(しょうぼうしちろう)ともいい、「失われた神」海神と伝わり、曹洞宗だけでしか見られません。

薬師堂は、昭和61年の改築時に薬師如来坐像と十二神将像の補修彩色が行われました。

昭和十年本堂再建、三十一世龍山大和尚を中興。

現在のご本尊は、明治の「寺院明細帳」では、本尊釈迦如来となっています。

大師堂脇の天神社祠には、没後の菅原道真を神格化した学問の神で雷神である白木一木彫の出世天神が祀られています。正式名称を天満大自在天神(てんまんだいじざいてんじん)というそうです。

拈華微笑(ねんげみしょう)、

言葉を使わず、心から心へ伝えること。また、伝えることができること。以心伝心。

仏教語で「拈華」は花をひねる意。「華」は草木の花の総称。「拈」は指先でひねること。

拈華微笑の句例「拈華微笑の間柄」、用例、心敬は「無師自悟」とか「頓悟直路（とんごじきろ）の法」とか、禅語をしきりに使っています。

そして、それを追いつめてゆけば霊山の拈華微笑までゆくだろう。唐木順三「日本人の心の歴史」類義語、以心伝心（いしんでんしん）、教外別伝（きょうげべつでん）不立文字（ふりゅうもんじ）

【故事】釈迦が霊鷲山（りょうじゅうさん）で弟子たちに仏法を説いたとき黙って大梵天王から受けた金波羅華（こんぱらげ）という金色の蓮の花をひねって見せると摩訶迦葉（まかかしょう）だけがその意味を悟って微笑んだので釈迦は彼だけに仏法の真理を授けたと言う故事によります。「花を捻りて微笑する」の合図は貴方の心を読みとれました。

打止

大権修利菩薩

我孫子駅前の国鉄庚申塔、

JR常磐線我孫子駅南口交番の後方に高さ２ｍ程の庚申塔が立っています。

碑文には、明治29年常磐線土浦と東京田端間が開通したが、開通記念式典は行われなかった。

だが、取手駅では事故が起きないのに、我孫子駅構内では列車事故が頻発したため、殉職者の供養と無事故祈願を誦して大正14年に建てられました。

庚申塔背面には「駅開構より30有余年、殉職事故死で20余名、亡霊の供養と事故防止を祈願して・・云々」と記述があります。

この碑の他に「我孫子駅記念碑」馬車鉄道開通に伴う記念碑（現JR成田線の一部）と蒸気機関車の碑があります。

我孫子駅の悲話

飯泉喜雄は、明治元年5日5日、相馬郡我孫子宿2640番地で出生しました。父は飯泉其恕、代々名主でした。青年になるまでの名を「喜之助」といい、後に「喜雄」と呼び変えました。

取手の染野勇三郎、島田重礼の下で漢学を学ぶ。

喜雄は、その生涯と財産の全てを我孫子駅の誘致に積極的に動いた。何といっても鉄道を誘致することで、多大の恩恵を受けると確信し、誘致運動に専念しました。

彼は、当時の役場である現我孫子寿保育園から高野山にかけての広い土地をかなり所有していたが、その土地を当時町はずれだった現在の駅付近の土地と交換して、停車場の用地を確保しました。

汽車に対する人々の認識は「火の粉をまき散らす」という危険性に反対する人が多く、駅舎や鉄路の建設は困惑したが、民家のないところに目をつけた喜雄の計画は功をなし、自ら停車場予定地として準備した場所を鉄道用地とし、その土地を無償提供して誘致の陳情を行い、我孫子駅の設置は決定した。

喜雄はこうして、私財を投げて鉄道誘致につぎ込み、我孫子の発展に尽くした結果は、喜雄が八千代町長（現柏市）になったのは鉄道出願から二年後、工事着工から八ヶ月後の明治28年7月でした。

明治34年12月に再び町長に就任。町長時代から手がけていた駅前の整備に尽力、停車場道の駅前より成田街道との交差点迄をつくり、駅及び道路に桜の木を植え、環境づくりに専念します。

その記念碑が「停車場道碑」と「桜樹植付記念碑」なのです。現在、我孫子駅南ロータリーの右側にある、花屋の前に置かれています。

喜雄は明治39年9月、結核にて38才で急逝。

だが、彼の死後、飯泉家の大悲劇は始まる。

四方八方から負債取り立てに人が集まり、残された家族も全然知らない借金の返済を迫る人達が、他人は勿論、近親者からもあらわれます。

未亡人になった妻「まさ」は証文もないままの要求にも応じて、永年続いた飯泉家の財産は、またたく間に無くなってしまった。周囲の急変と気苦労が重なり、精神的にもまいってしまい、健康を害し、

明治43年6月13日、41才で亡くなりました。
さらに、長男喜一郎は24才、次男喜輔幼少で、三男喜久雄も19才で死亡。
喜雄の血を直接継いでいる者は今、誰一人いない。

我孫子市史研究第十号 より

我孫子縁の人々、我孫子は常磐線の停車場が出来ると、東京から一時間程の距離で、また風光明媚な水の都であったため、多くの人々が別荘地として移り住んだ著名人をご紹介します。

※我孫子を北の鎌倉と言う人もいるが浦和には「鎌倉文士と浦和画家」による北の鎌倉説がある様です。

岡田武松 おかだ たけまつ（1874～1956）
気象学者。布佐に生まれる。日本の気象観測事業の確立に貢献した気象学界のパイオニアである。

嘉納治五郎 かのう じごろう（1860～1938）
柔道家、教育家(筑波大学学長歴任)。
天神山に別荘を建てる。講道館を創設し、柔道の発展に貢献する。筑波大学長歴任。

志賀直哉 しが なおや（1883～1971）作家。
大正4年から12年までに弁天山在住。雑誌「白樺」の創刊に参加。「小説の神様」とも称される。
「ハケの道」沿いの志賀直哉邸跡に書斎が残されています。移設して復元された建物です。

滝井孝作 たきい こうさく（1894～1984）作家。
志賀直哉にすすめられ大正11年から12年にかけて我孫子に移り住む。代表作「無限抱擁」を執筆。

田口静 たぐち しずか（1907～1977）医師。
湖北に生まれる。当時無医村だったこの地区に医院を開業。地域住民に「赤ひげ先生」と慕われ、献身的な医療活動を行なった。

血脇守之助 ちわき もりのすけ（1870～1947）
歯科医師。我孫子に生まれる。日本の歯科医学の発展に貢献し、後進を育てた。野口英世もその門弟で渡米時の借金は有名なお話です。

中勘助 なか かんすけ（1885～1965）作家。
大正9年から11年まで白山在住。幼年時代の思い出をもとにした「銀の匙」で世に認められる。

中野治房 なかの はるふさ（1883～1973）
植物学者。中里に生まれる。手賀沼も含めた湖沼の植物研究から出発し、幅広い研究活動を展開。
大正9年に「湖北村誌」を発刊。

バーナード リーチ Bernard Leach（1887～1979）
イギリスの著名な陶芸家。柳宗悦らの民芸運動に参加。我孫子の柳邸に窯を開き、作陶に励んだ。

武者小路実篤 むしゃのこうじ さねあつ（1885～1976）
作家。大正5年から7年まで根戸在住。雑誌「白樺」の創刊。白樺派の代表的存在となる。

村川堅固と御子息堅太郎 （1875～1946）
旧村川別荘、西洋古代史を専門家、堅太郎は紀行随筆「地中海からの手紙」、西洋史。別荘に居住。
子の神大黒天山門脇の木戸が別荘出入口です。
入場無料です、日韓洋折衷(せっちゅう)の建築物と傾斜の庭園を観覧できます。

柳宗悦 やなぎ むねよし（1889～1961）
民芸研究家。大正3年から10年まで天神山在住。雑誌「白樺」の創刊に参加。日本民芸運動の創始者。
日本民藝館設立。
天神坂の台地上には柳宗悦の旧住居三樹荘があり、兼子夫人とともに居住していました、バーナードリーチは陶器窯があったため何時も来ていた様です。

柳兼子 やなぎ かねこ（1892～1984）声楽家。
大正3年柳宗悦と結婚し10年まで我孫子に住む。晩年まで声楽の教師を務める傍ら、数々の独唱会や演奏会を開き、海外でも絶賛を博した。その歌声は「日本の声楽の母」と称えられている。
芸大上野音楽堂に詳しく展示されています。

柳田国男 やなぎだ くにお（1876～1962）
民俗学者。布佐に実家の松岡家があり、青少年時代によくこの地を訪れた。日本民俗学の創立者。

山下清 やました きよし（1922～1971）画家。
昭和16年頃から昭和21年頃まで、駅弁屋「弥生軒」

のもとに身を寄せ、雑用に従事しながら暮らしていた。鮮やかな色の貼り絵で有名で放浪の画家と呼ばれているが、写生ではなくアトリエで思い出しながらの印象画でした。ゴッホに並ぶ世界的な画家。

唐揚げ駅そば「弥生軒」

我孫子駅快速ホーム上の立食いそば屋で唐揚げそばが名物です。創業は昭和3年、駅弁を販売していたが、東北新幹線開業により急行列車「盛岡号」の廃止と共に駅弁も廃止されました。

山下清の我孫子駅シリーズは駅弁の包装紙に使われたが、最後の冬は昭和46年7月に亡くり、無。

杉村　楚人冠　すぎむら そじんかん（1872～1945）

ジャーナリスト。本名は広太郎

大正13年から我孫子に永住。随筆「湖畔吟」などで、手賀沼周辺を全国に紹介。俳句結社湖畔吟社を作るなど、地元の文化向上に努めた。

日本で初めて新聞社に調査部や記事審査部を設け、新聞の縮刷版を企画発行するなど、先進的な新聞人でした。一方で、独特の皮肉とユーモアにあふれた文章は人気を博し、まだ現役の文筆家として活躍しているうちから全12巻の予定で全集が刊行され、さらに増刊されて18巻にも及ぶほどでした。

楚人冠は関東大震災で二人の子どもを失ったのを機に一家で我孫子に転居したそうです。

以後、我孫子ゴルフ倶楽部の建設を町長に進言したり、手賀沼の干拓に反対し景観保護活動に取り組むなど、風光明媚な郊外の住宅地、観光地としての我孫子の発展に尽力しました？。一方、主宰した俳句結社「湖畔吟社」をはじめ、我孫子の人々と親しく交わり、慕われました。

空海も修験道（しゅげんどう）

修験道は、山へ籠もって厳しい修行を行うことにより、悟りを得ることを目的とする日本古来の山岳信仰が仏教に取り入れられた日本独特の混淆（こんこう）宗教で、修験宗とも云われていました。

修験道の実践者を修験者または山伏といいます。「空海、大学中退後なぞの十年間」は山岳修行を実践していたと云われていますが、何時、何処では、謎のままです。30歳過ぎで遣唐使として唐へ渡る。

修験者であった空海は高野山信仰に取入れられ、「高野聖（こうやひじり）」として全国に広がりました

役行者（えんのぎょうじゃ）

七世紀末に役行者は、大和国の葛城（木）山を中心に活動した呪術者。生没年不詳。役小角（えんのおづぬ）、役君（えのきみ）などとも呼ばれ、後に修験道の開祖として尊崇される。続日本紀によると、文武三年（699）朝廷は役君小角を伊豆国に流した。

葛城山に住む小角は鬼神を使役して水をくませ、薪を集めさせるなどし、その命令に従わなければ呪術によって縛るという神通力の持主として知られていたが弟子の韓国連広足（からくにのむらじひろたり）が師の能力をねたみ、小角が妖術を使って世人を惑わしていると朝廷に讒訴（ざんそ）したために，流罪が行われたといわれています。

役行者は別称役優婆塞（えんのうばそく）とも呼ばれる。御真言を「おんぎゃくぎゃくえんのうばそくあらんきゃそわか」と唱える所以であるが、優婆塞というのは仏教の四衆の一つ。四衆とは比丘（びく）＝出家の男性修行者、比丘尼（びくに）＝出家の女性修行者であり、優婆塞（うばそく）＝在家の男性修行者、優婆夷（うばい）＝在家の女性修行者の四つをいいます。

つまり役行者は終生を在俗（ざいぞく）、出家しない在家者のまま通したことから、えんのうばそく と呼ばれ、そこには修験道が常に庶民の中にあって、世俗の中から遊離しないことが象徴されていました。

関東以北の空海伝説は確証がない。

空海が会津へ来たという確証はなく、会津五薬師の空海開基説は逸話と結論されています。また、徳一大師も同じく弘法大師と呼ばれていることがあります。修験者や聖等の功績であろう所為が、時代経過で法大師となってしまったのでしょう。

四国大師霊場第75番は弘法大師生誕の寺

屏風浦五岳山誕生院総本山善通寺

ご本尊　薬師如来　真言宗善通寺派

弘法大師空海は、宝亀5年(774)6月15日、御父佐伯善通(さえきよしみち)と御母玉寄御前(たまよりごぜん)の子として、香川県の善通寺に御誕生になりました。幼名を「真魚(まお)」と名付けられ、ご両親の寵愛を受け信仰心の篤い御子にお育ちになりました。

真魚七歳の時「多くの人を救いたい」と断崖から飛び降りますが仏に救われたと云う、四国73番出釈迦寺(しゅっしゃかじ)我拝師山(がはいざん)捨身ヶ嶽(しゃしんがたけ)禅定奥の院遥拝所があります。

真魚は、善通寺で仏像や仏典僧侶に親しまれ、延暦10年(791)18歳で都の大学に入学しました。

幼名を真魚から空海と変えたのもこの頃の様です

しかし、仏法に目覚め山林修行に身を投じた空海は大学をやめ山岳修行に励み身を暗ます。

延暦の遣唐使として延暦23年、長安青竜寺の恵果和尚から真言密教を伝授して、京都東寺で真言宗を布教します。更に高野山に移り大伽藍寺院を創建、自ら奥の院に入寂、皆さんと共に旅を続けています。

日本史上、朝廷から大師号を賜った高僧は25人います。真言宗の宗祖遍照金剛空海も延喜21年(921)に「弘法大師」の諡号を賜りました。

役行者とは、7～8世紀に奈良を中心に活動していたと思われる、修験道の開祖とされている。

在家仏教信者として修行した人

四国霊場七十五番善通寺山門と五重塔

ハケの道

関東以北では台地斜面下の地下水がしみだすあたりを「捌(は)け」と呼びます。

我孫子南側のハケの道は、古くは手賀沼の水際で、丘と沼、村と村を結ぶ生活道路でした。

都下小金井市の国分寺崖線は3㎞のハケ道です。

杉村楚人冠記念館に於いて「あびこのほとけ」を12月10日迄展示、次回相馬霊場定例会で紹介する湖北の中里薬師堂の秘仏薬師三尊像が展示されます。

新四国相馬霊場を巡る会　参加者配布資料